

# 南窗集

三好達治

青空文庫



## 鴉

静かな村の街道を 笥が横に越えてゐる  
 それに一羽の鴉がとまつて 木洩れ陽の中に  
 空を仰ぎ 地を眺め 私がその下を通るとき  
 ある微妙な均衡の上に 翼を<sup>をさ</sup>めて 秤<sup>はかり</sup>のやうに揺れてゐた

## 湯沸し

たぎり初めた湯沸し…… それはお晝休みの 小學校の校庭だ  
 藤棚がある 池がある 僕らはそこでじゃんけんする  
 僕は走る 僕は走る…… かうして肱をついたまま  
 夜の中に たぎり初めた湯沸し……

## 静夜

柱時計のチクタク ああ時間の燕らが

山を越える 海を越える 何といふ静けさだらう

森の中で 鼻が鼓をうつ やつとこの日頃

私は夜に對し得た 壁を眺め 手を眺め

## 蟋蟀

新聞紙に音をたてて 葡萄のやうな腹の 蟋蟀が一匹とびだした

明日はクリスマス この獨りの夜を 「愕かすぢやないか

魔法使ひぢやあるまいね そんなに向う見ずに 私の膝にとび乗つて」

「ごめんなさい 何しろ寒くつて……」

## 信號

小舎の水車 藪かげに一株の椿

新らしい轍に蝶が下りる それは向きをかへながら

静かな翼の抑揚に 私の歩みを押しとどめる

「踏切りよ ここは……」 私は立ちどまる

## 椿花

これはいづこの國 いづれの世の建築だらう 私の夢なら

こんな建ものの中に住みたい 今朝の雨に濡れて

掌上に ややに重い一輪の紅椿 その壁に凭れて

私は樂器を奏でる この騎士<sup>ナイト</sup>の唇を 花粉が染める

## ブブル

ブルブル お前は愚かな犬 尻尾をよごして  
ブルブル けれどもお前の眼  
それは二つの湖水のやうだ 私の膝に顔を置いて  
ブルブル お前と私と 風を聴く

## 遅刻

やれやれ汽船ふねは出てしまつた  
森々たる春 霞の奥の遠い島  
島の火山 私の見る電柱に  
風に吹かれる蟲の觸覺ひげ

## 節物 四章

## 家鴨

にび色の空のもと ほど近い海の匂ひ  
汪洋とした川口の 引き潮どきを  
家鴨が一羽流れてゆく  
右を眺め 左を眺め

## 蟹

村長さんの屋敷の裏 小川の樋に  
泥まみれの蟹がのぼつて  
ひとりで何か呟いてゐる  
新らしい入道雲が 土手の向うにのび上る

## 鶺鴒

もみぢ  
黄葉して 日に日に山が明るくなる

谿川は それだけ緑りを押し流す

白いひと組

黄色いひと組

せきれい  
鶺鴒が私に告げる

「この川の石がみんなまるいのは 私の尻尾でたた叩いたからよ」

## 馬

茶の丘や

はねつるべ  
桔臯

馬

梅の花

友を喪ふ 四章



## 首途

眞夜中に 格納庫を出た飛行船は

ひとしきり咳をして 薔薇の花ほど血を吐いて

梶井君 君はそのまま昇天した

友よ ああ暫らくのお別れだ…… おつつけ僕から訪ねよう！

## 展墓

梶井君 今僕のかうして窓から眺めてゐる 病院の庭に

山羊の親仔が鳴いてゐる 新緑の梢を雲が飛びすぎ

その樹立の向うに 籠の雲雀が歌つてゐる

僕は考へる ここを退院したなら 君の墓に詣らうと

## 路上

卷いた樂譜を手にもつて 君は丘から降りてきた 歌ひながら  
村から僕は歸つてきた 洋杖ステッキを振りながら  
……ある雲は夕焼のして春の鳥  
それはそのまま 思ひ出のやうなひと時を 遠くに富士が見えてゐた

## 服喪

啼きながら鴉がすぎる いま春の日の眞晝どき  
僕の心は喪服を着て 窓に凭れる 友よ  
友よ 空に消えた鴉の聲 木の間を歩む少女らの  
日向に光る黒髪の 悲しや 美しや あはれ命あるこのひと時を 僕は見る

この庭の叔母さんたち 牝鶏の艦隊は樹の間を來て  
私の窓の下で 彼女らは砂を浴びる  
やがてその黄塵が 私の額に流れてくる なるほど……と私はうなづく  
ははあん 今年の春は この邊から始まるな

## 牛

つんと澄して 新緑の樹立の向うを 電車が行く  
赭牛が土手に立つて それを呼びとめる 「おおい…… おおい……  
俺はひとり…… 日が暮れるよう……」 だがまだ三時  
曳船が上つてくる あげ潮にのつて 綿を積んだ荷船が三艘五艘

## 旅人

ひとたび經て 再びは來ない野中の道  
踏切り越えて 菜の畑 麥の畑  
丘の上の小學校で 鐘が鳴る  
鳩が飛びたつ

## 鹿

午前の森に 鹿が坐つてゐる  
その背中に その角の影  
微風を間まぎつて 虻が一匹飛んでくる  
遙かな谿川を聴いてゐる その耳もとに

## 土

蟻が

蝶の羽をひいて行く

ああ

ヨツトのやうだ

## 路傍

路にそへる

小窓の中の　かはたれに

けふも動ける

馬の臀見ゆ

## 霽れ

土藏の屋根に　鯉幟の尾が垂れてゐる

赤煉瓦の工場の裏に　水禽が二羽まひ下りる

運河の水門は閉まつたまま 海は泥を嚙んでゐる  
——みな 意味あるさまに

## 旅舎

荷馬車の宿で 馬が鼻を鳴らしてゐる  
憂々と 前脚で床を搔く馬よ その音はやみ その音はまた始まる  
夜の悩み 夜の莊嚴  
私の眠りもまた成りがたい 天井に睡る蠅を見ながら

### 間庭 二章

## 黒蟻

疾風が砂を動かす

行路難行路難 蟻は立ちどまり

蟻は草の根にしがみつく 疾風が蟻をころがす

轉がりながら 走りながら 蟻よ 君らが鐵亞鈴に見えてくる

## 夕焼

風のふくあたりに忘れられた 草の葉と砂を盛った小さな食器 ああ

この庭の ここに坐つて

家庭の遊戯をして遊んだ それらの手 ちりぢりに歸つてしまった手を思へば

それらの髪 それらの着物の匂ひもきこえるやう

## 病床

灰白い雲の壁に 小鳥の群れが沈んでゆく ああ遠い

新緑の梢が揺れ 私の窓のカーテンが揺れる  
所在ないひと時 紙芝居の太鼓も聞える  
電球に私の病床が映つてゐる

## 本

蝶よ 白い本

蝶よ 軽い本

水平線を縫ひながら

砂丘の上を舞ひのぼる

## 蝿

「あんなに青かつたのが  
こんなに黒くなつたでせう



そうれ

「ごらん」

## 街道

鐘が鳴る 小學校が静かになる

竹藪に吹入る風 竹藪から揚羽の蝶が飛んでくる

旅人が蕎麥屋に入る

郵便局の前に バスが止る

## 裾野

その生涯をもて 小鳥らは

一つの歌をうたひ暮す 單調に 美しく

疑ふ勿れ 黙す勿れ

もだ

ひと日とて 與へられたこの命を――

# 青空文庫情報

底本：「三好達治全集第一卷」筑摩書房

1964（昭和39）年10月15日発行

初出：友を喪ふ 四章「文藝春秋」

1932（昭和7）年5月

土「作品 三卷七號」

1932（昭和7）年7月

路傍「作品 三卷七號」

1932（昭和7）年7月

霽れ「作品 三卷七號」

1932（昭和7）年7月

旅舎「作品 三卷七號」

1932（昭和7）年7月

入力・・・kompass

校正：大久保 知美

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 南窗集

三好達治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>